

2. 最も嫌だった学校外学習

ここでは、小・中学校時代にした一般的な習い事、学習系習い事、体験学習のうちで、大学生になった今ふりかえてみて、最も嫌だったと思うものについて聞いた結果をまとめた。

◆「最も嫌なもの」と「最も有意義なもの」の両方の評価を受けた運動系 (図4-5、6)

最も嫌だったと思う一般的な習い事、学習系習い事、体験学習名を自由記述で書き込んでもらい、前述と同じ7分野に分けた(複数回答)。分野別に嫌だったとする割合の高い順に見てみると、「運動系」19.8%が最も高

く、次いで「学習系」17.2%、「音楽系」12.3%、「習字・そろばん系」11.3%、「英語系」3.6%、「体験系」1.4%の順であった。運動系は、「最も有意義」「最も嫌」のどちらでも数値が高くなっている。

男女差を見ると、10ポイント以上開いたものは、音楽系で、女子の方が男子よりも10.3ポイント高い。「最も有意義」の場合と同様の傾向である。一方、男子の方が高かったのは、学習系で、その差は7.1ポイントであった。

種目別に見ると、1位「楽器」11.5%、2位「スイミングスクール」11.4%、3位「進学塾」9.9%、4位「そろばん」5.9%だった。

図4-5 最も嫌だった学校外学習 (複数回答)

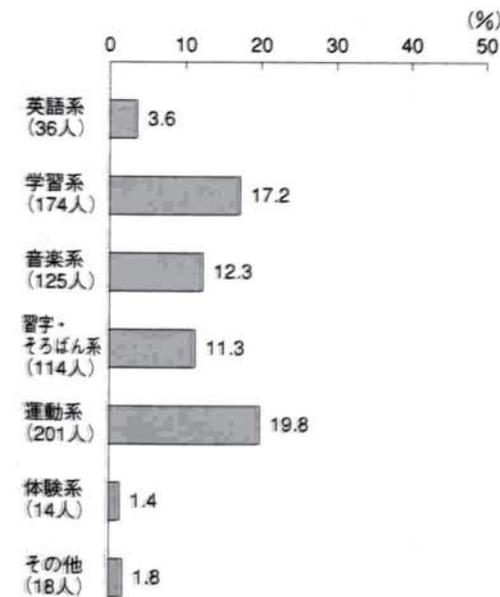
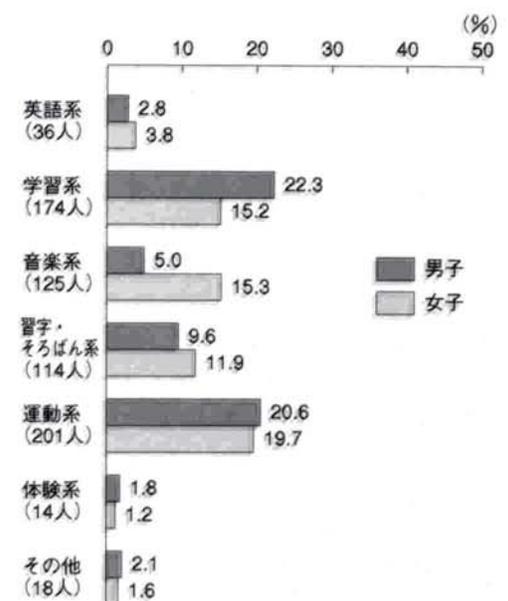


図4-6 最も嫌だった学校外学習(性別) (複数回答)



第4章
 ▼最も有意義な学校外学習
 ○最も嫌だった学校外学習
 1110
 11
 ○10
 2

◆最も嫌な理由は、「練習が苦痛」

(図4-7、8)

どのような影響を受けると、最も嫌な評価につながるのか、具体的な影響の内容について調べた。選択肢は、動機の有無、役立ち感、人間関係、時間拘束、失敗経験、練習の負担感などを盛り込み、あてはまる項目に○をつけてもらった。

最も高かったのは「練習が苦痛だったから」50.3%、次いで「上達や進歩がなかったから」33.3%、「自分からやりたいと思わなかったから」31.7%、「とにかく楽しくなかったから」29.1%であった。

逆に低かったのは、「人前で失敗をしたこ

とで、自信をなくしたから」4.7%、「発表会など、とても緊張したから」5.8%、「場所が遠くて、通うのが大変だったから」6.3%、「親によく叱られたから」6.7%などであった。

これらから、嫌いになる要素としては、苦痛な練習を必要とすること、目に見える成果を得られないこと、自主的に関わっていないこと、楽しく取り組めないことなどが挙げられる。

男女で10ポイント以上開いた項目は、「友だちと遊ぶ時間が減ったから」男子30.0%、女子13.5%で、男子が16.5ポイント高く、「上達や進歩がなかったから」男子25.6%、女子35.6%で、女子が10ポイント高かった。その他の項目では、大きな開きは見られなかった。

図4-7 最も嫌だった学校外学習の理由(複数回答)

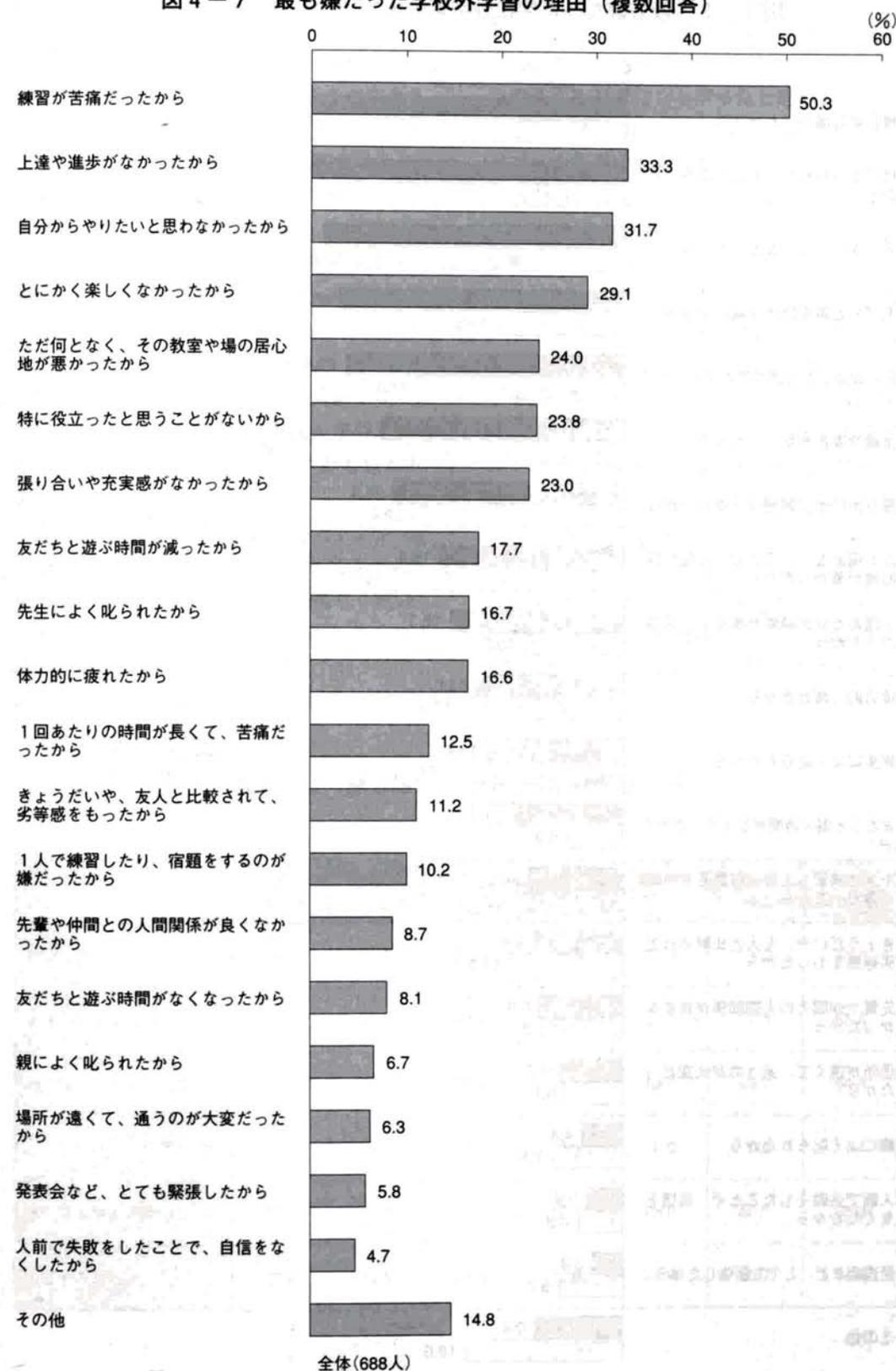
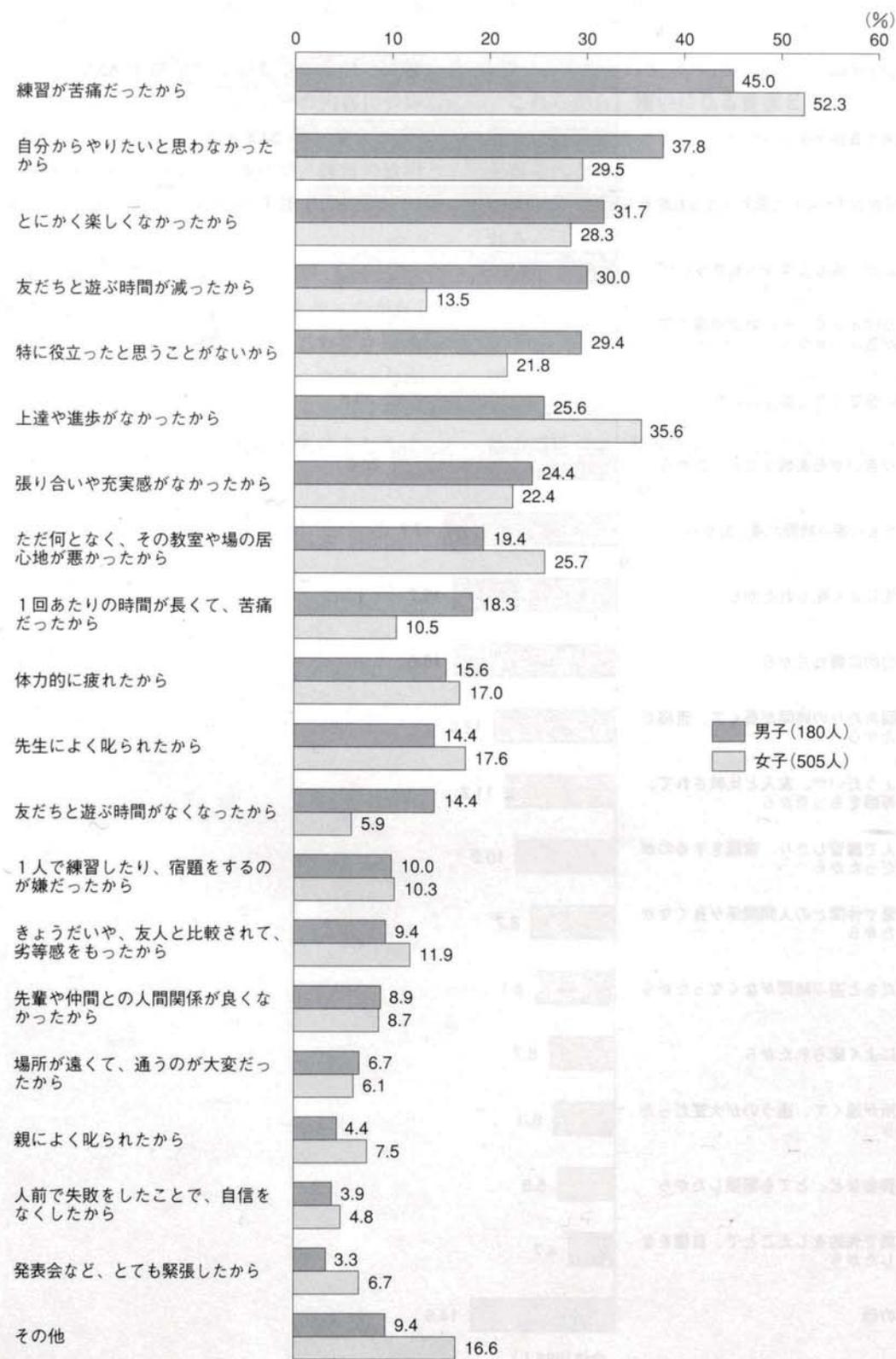


図4-8 最も嫌だった学校外学習の理由(性別)(複数回答)



◆分野別の嫌な理由(表4-3)

前述した7分野に分けて、最も嫌と評価される内容を調べた。選択肢から主なものを6項目選び、分野別の傾向を比較した。それぞれの分野ごとに、嫌な評価の内容が異なり、特徴が出ている。

音楽系は、「練習が苦痛だった」が他と比較して最も高い(82.4%)。音楽系の習い事では楽器が最も多い。そのため、家での練習が必要であることが影響していると思われる。また、表には出ていないが、「やりたいと思わなかった」という項目の数値が高い。楽器の場合、開始時期は幼児期が多いため、本人の動機の弱さが関係していると思われる。

運動系では、「練習が苦痛だった」77.6%、「上達や進歩がなかった」37.3%であった。音楽系と同様、「練習の苦痛」が著しく高い。

英語系では、「上達や進歩がなかった」47.2%、「特に役立ったと思わない」41.7%で、どちらも他の分野に比較して最も高い数値と

なっている。英語系習い事で多いのは、英会話教室だが、教室で習った成果を学校の授業や生活場面で発揮する機会が少ないことが、このような結果につながったと思われる。

学習系は、全体的に数値が3割以下と低く、目立った特徴は見られなかった。

体験系では、「場の居心地が悪かった」50.0%が、他の分野と比較して最も高かった。体験系の中心は、体験教室などであり、1人ではなく複数で協力しあうことが活動の基本になることが多い。そのため、居心地や人間関係の問題が多くなるものと思われる。

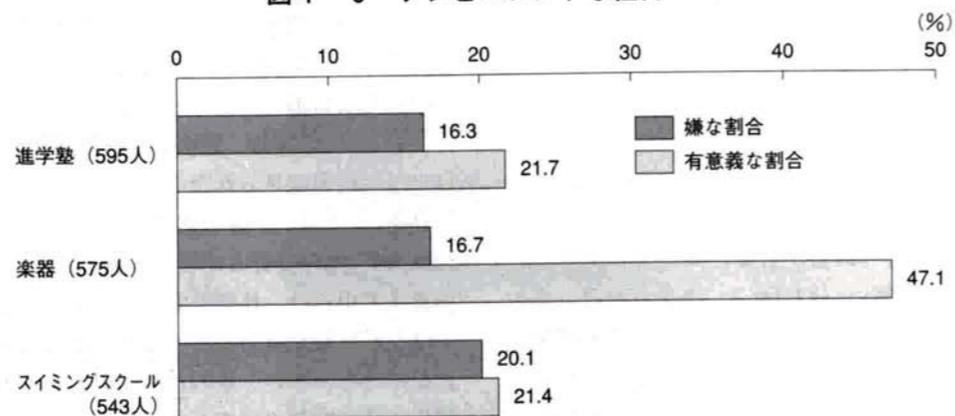
また、「特に役立ったと思わない」も35.7%で、英語系に次いで高い。これは、最も有意義だった理由の中で「授業に役立つ・志望校合格に役立つ」という項目の数値が低かった傾向と一致している(表4-2)。

「楽しくなかった」は、すべての分野にわたって25%~35%を占めていた。分野に限らず、楽しさは必須条件となっているようだ(7分野のうち、「その他」は分析からはずしている)。

表4-3 最も嫌だった学校外学習の分野別

	英語系 (36人)	学習系 (174人)	音楽系 (125人)	習字・ そろばん系 (114人)	運動系 (201人)	体験系 (14人)	その他 (18人)
練習が苦痛だった	19.4	13.8	82.4	43.9	77.6	14.3	44.4
上達や進歩がなかった	47.2	22.4	42.4	33.3	37.3	7.1	55.6
特に役立ったと思わない	41.7	30.5	14.4	34.2	13.4	35.7	44.4
1人での練習や宿題が嫌だった	5.6	14.4	21.6	13.1	0.9	0.0	11.1
場の居心地が悪かった	38.9	31.0	14.4	16.7	23.9	50.0	33.3
楽しくなかった	27.8	34.5	25.6	30.0	28.4	35.7	44.4

図4-9 アンビバレントな種目



◆プラス評価をする割合が高い「楽器」経験者 (図4-9)

今回の調査では、同じ種目で「最も有意義なもの」と「最も嫌なもの」の両方ともに高い割合となったものがある。ここでは、そうした種目をアンビバレントな種目と呼ぶことにする。アンビバレントな種目の析出方法は、まずどちらにも上位にランクされたものをピックアップし、続いてそれぞれの経験者に占める割合を出した。ピックアップされたのは、進学塾、楽器、スイミングスクールの上位3種目であった。有意義なものとしても、嫌な

ものとしても、どれも経験者の16%~22%程度が選んでいる。これら3つは、向き不向きがはげしい習い事といえる。なお、楽器経験者に占める割合が有意義だったと回答した割合については、唯一47.1%と高かった。この結果から、進学塾とスイミングスクールは「最も有意義」と「最も嫌」のどちらの評価も同じくらいあるが、楽器の場合は、他に比べて「最も嫌」な評価より「最も有意義」な評価の方が高い。つまり楽器は、経験者のうち、プラスの評価をする人の方が、マイナス評価をする人よりも多い習い事であるといえる。